

連休はもうすぐ！ お出かけすべきか？ ゆっくり休むべきか？

発行元：108-8345 港区三田2-15-45
慶應義塾大学商学部 吉川肇子研究室内
クロスロードサポーター事務局

新作問題大特集です

ファシリテータの皆さんこんにちは。新年度で職場を異動された方も多いかと思
います。そろそろ新しい職場には、なじまれましたか？

さて今号は、前回お約束したとおり、クロスロード新作問題の大特集です。新作
問題提供を快くお許しいただきました静岡県の皆様に厚く御礼申し上げます。看護
師編と学校教員編です。3ページからごらん下さい。

また、新たに火山学者編もご紹介いただきました。火山防災
についても解説もいただきましたので、是非お読みください。

なお、新作問題は、随時受付中です。事務局までご報告くだ
さい。共有システムへの掲載もどうぞよろしくお願いいたしま
す。

電子投稿はこちら↓

<http://maechan.net/crossroad/toukou.html>



大発明！

「ぐらっとバッグ・かぶっちょき (GB)」は スゴイ！

みなさま、「ぐらっとバッグ・かぶっちょき (略してGB, 実用新案願出願中)」を
ご存じですか？ 実は、私 (矢守) も吉川先生も、GB (パソコンバックタイプ) の
愛用者。これが、機能性はもちろん (パソコンバックにもリュックにも、防災頭巾
にもなります)、和風の風合いがいいんです。私たちは、「クロスロード」をお引
き立ていただき、この新聞でもずっと漫画を担当してくださっている高知県地震・
防災課の小溝さんを通じて、このすばらしいアイテムと、その製作にとりくまれて
いる大変魅力的な女性、谷口静香 (高知県安芸市) さんを知りました。

実物は、ファシリテータの集い東京会場でごらんになった方もあると思います。
次回その谷口さんをお願いして直接ご寄稿いただくことになりました。まずは予告
です。実物の写真をどうぞごらんいただいて、次号をお楽しみに！

変身！



目次

新作問題大特集 1

ぐらっとバッグ 1

クロスロードに
エールです！ 2

応援しています、
クロスロード！ 2

看護師編問題 3

教員編問題 4

クロスロード
火山学者編 5

こんなところに
心理学(11) 6

社会的な手抜き 6

進級者発表！ 7

夢見る防災教育 7

子供に教える安全 8

みなさんへ より 8
あなたへ

クロスロード次号のご案内

発行予定日：6. 26
夏の旅行のおともに
クロスロード！

責任編集

- ◆ チームクロスロード
- ◆ クロスロード・サポーター
- ◆ SPECIAL THANKS:
高知県地震・防災課
小溝智子 (漫画企画)

NHK大阪の近藤さんから「クロスロード」にエールです！

NHK大阪放送局にお勤めの近藤誠司さんから、「クロスロード」に熱いエールを送っていただきました(2ページ参照)。近藤さんは、平成6年からNHK(日本放送協会)に勤務。阪神・淡路大震災では、1月17日当日から被災地の取材をされました。そして、下記のように、5年前から、1月17日の「NHKスペシャル」を企画制作されています。みなさまの中にも、「おっ、それ見た!」という方、多いと思います。

また、近藤さんは、NHK神戸放送局に勤務していた平成16年、「震災メッセージ」というニュースコーナーを開発。このコーナーは、総務省消防庁から「第9回まちづくり大賞」を受賞し、現在も放送中です。

「防災士」の資格もお持ちで、筋金入りの防災通の近藤さん。今から5年前、平成14年に、矢守先生が「クローズアップ現代」(「震災の記録を伝えたい」というテーマでした)の取材でお世話になって以来、いろいろなところでお世話になっていて、「クロスロード」にも直接・間接に、絶大なご支援いただいています。

近藤誠司ディレクターが企画・制作された「NHKスペシャル」

平成15年「減災」

平成16年「地域防災力が命を救う」

平成17年「焼け跡のまちは、いま」

平成18年「活断層列島」

平成19年「情報テクノロジーは命を救えるか」

応援しています、クロスロード！

防災……。みなさんが熱心に取り組まれているこのテーマ、TVメディアの制作者の現場では、一筋縄ではいかない「手ごわい」テーマだと受け止められています。

どうということかといいますと、一生懸命に工夫をこらして番組を作るのですが、悲しいかな、じっくり最後まで見てもらえないことが多いのです。そしてさらに手ごわいのが、番組を見たあとの「実践」です。自分で考えてみる、自分で実行してみる……。是非そうした取り組みに結びつけてほしいと願うのですが、なかなかそこまでには至らないようです。

原因はいくつもあると思います。番組の演出が、おもしろくない、マンネリ、説教臭い……。情報が断片的、一般的、暮らしに密着していない……。

こうした問題の背景のひとつに、メディアは「情報を伝える側」であり、視聴者はあくまで「情報を受け取る側」とあるというふうな、それぞれの立場を固定化してしまうメディアの姿勢があげられると思います。これでは、一方的な押し付けだし、視聴者は受動的な態度しかとれないし、端的に言って、「つまらない」!

ここにおいて私が是非参考にしたいと思ったのが……。そうです、クロスロードでした。参加者のみなさんの熱い姿勢、盛んな議論、さらには会場に響く笑い声……。クロスロードは能動的な協働を促すツールであり、そこには双方向のコミュニケーションが生まれています。端的に言って、「おもしろい」!

やりとりされる情報が「完成型(模範解答)」から出発していない点が重要だと思うのです。みんなの発想や経験を束ねて、「未完成」な情報をより実践的な「知恵」に高めていく……。その過程を丸ごと味わ

おうっていうのだから、それはもう濃密な時間になるわけですね。TVメディアには無い特長の数々、ある意味、うらやましいです。

まあ、ほめてばかりでは悔しいので、今後はクロスロード的な要素を加味した番組も企画してみたいなあと思っています。その時には是非、みなさんのお知恵をお借りできれば幸いです。お互いに防災力の向上に寄与できるメディア、ツールになりうるよう、これからも切磋琢磨していきましょう。

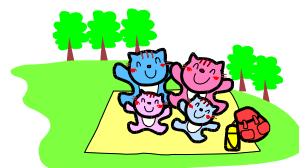
(NHK大阪放送局 ディレクター近藤誠司さん)



クロスロード新作問題大特集！

前号で大特集しました静岡県の各防災局の皆様から、新作問題を快くご提供いただきました。前回紙面の都合で掲載できませんでしたので、本号で掲載いたします。

まず下の一覧は、看護師編です。また、次のページに、学校教員編を掲載させていただきました。力作揃いです。じっくりやってみてくださいね。



あなたは……	基本設定	YES	NO
看護師	発災から3日目、ようやく病院に出勤できた。猫の手も借りたい忙しさの中、同期の看護師の訃報が届いた。今夜が通夜。発災から一度も帰宅していない人もいる。でも、どうし行くても出席したい。なんとしてでも行く？		行かない
小児病棟の看護師	ここは3階。未明の地震で停電。幸い受傷した患児はいないが、全員が機械を使った点滴を行っている。危険なので1階に避難するよう指示が出た。点滴をどうする？ 抜く？ 抜かない？	抜く	抜かない
被災病院の責任者	地震発生3日目、入院病棟が傾きかけているという噂が流れ始めた。入院患者も職員も不安な顔をしている。しかし、確かな情報はない。入院患者をどうする？ 避難させる？	避難させる	ここに いる
病院勤務の看護師	交通網の遮断で、片道3時間かけて通勤している。泊り込みで働いている仲間たちと励まし合い、無我夢中で働いた。ところが、バスで10分の人がバスの不通を理由に出勤していないことを知った。許せる？	許せる	許せない
病棟勤務看護師	看護スタッフの6割弱しか出勤できない状況で、他病棟の応援に行くように指示が出た。自分の病棟もスタッフ不足で危険さを感じる状況。できれば自分の病棟で患者さんを看護したい……。指示に従う？	指示に従う	従わない
ボランティア担当	遠方からきているボランティアから、「提供された宿泊所が男性と女性が同じなのはおかしい」と苦情を言ってきた。避難所や救護所はどこも男女とも一緒なのに……。部屋を無理して確保する？	確保する	そのまま
非番で避難所に避難している看護師2人	避難所の救護所で「だめっ」といわれ医師が立ち去ってしまった重症者。そばにいる家族は呆然としながらも、看護師である私たちに「なんとかして！」と目で訴えている。心肺蘇生を行なう？	蘇生する	しない
災害ボランティアナース	発災直後に現場で活動した前任者が、作り置きの上清液を各避難所に配りそれが継続されている。2週間後に被災現場に入った後任者が「作り置きは、濃度が低下して効果が薄くなる。こんなやり方はだめ！」と非難めいた発言をはじめた。あなたは前任者の方法を間違っていると思う？	間違っていると思う	思わない
救護所担当ナース	被災から10日後。毎日熱傷の包帯交換に来ている女性が「隣のおばあさんもひどいやけどを負っているが、動けないのでずっと家にいる。私はまだ良いほうだ。」と言っているのを耳にした。すぐに回診に行く？	回診に行く	行かない
病院勤務看護師	発災2日目。病院が被災トイレが使用できないため閉鎖したが、いつのまにか糞尿が溢れ悪臭が漂っている。清掃担当者はまだ登院できないでいる。衛生面を考えると放置できない状況。看護職で汚物処理をやる？	やる	やらない

連休はもうすぐ！
お出かけすべきか？
ゆっくり休むべきか？

あなたは……	基本設定	YES	NO
教頭	大地震発生直後、多くの避難住民が避難所開設を待っていると連絡があった。避難所開設のため勤務校へ向かうが、途中で流血し、意識はあるが動けない人を発見。まわりに人はいない。あなたはその人を助ける？	助ける	助けない
保護者	大地震発生後、我が子が通う小学校で大きな被害が出ていると確かな情報を得た。学校へ向かうが、途中で建物の下じきになっている人の「助けて！」という声を聞いた。あなたは、すぐ救助する？	救助する	救助しない
小学校教諭	校外学習で近くの公園に児童30人を一人で引率中、大地震発生。倒壊物により足を骨折した子と脊髄を損傷した可能性のある子が2名いる。あなたはそこに残り、他の児童だけで学校に帰らせる？	帰らせる	帰らせない
指定救護所の教頭	大地震発生から2日後、学校にけが人が次々に運ばれてくる。救護所の人手が足りないが、担任らは生徒の安否を確認中。医師から救護所の応援を頼まれた。あなたは担任らを救護所の手伝いに行かせる？	行かせる	行かせない
中学サッカー一部顧問	休日、サッカー一部のみ学校で練習中、地震発生。サッカー部生徒は全員無事だが、他に職員はいない。震度や規模はわからないが、まわりを見る限り被害は軽微のようである。あなたは生徒を帰宅させる？	帰宅させる	帰宅させない
校長	注意情報が発表された。保護者への引渡しで混みあう中、ある児童の近隣に住むという女性が、「保護者に頼まれ、児童を引き取りに来た。」と児童を連れて帰ろうとする。あなたは児童を引き渡す？	引き渡す	引き渡さない
校長	大地震発生後、雨の中、学校に避難住民が殺到。校内は人で溢れ返り、場所が足りない。残るは職員室と校長室のみ。乳児を抱えた母親に「校長室に入れてほしい。」とお願いされた。あなたは校長室に入れる？	入れる	入れない
小学校教諭	大地震から5日経過。藤枝市在住の自分と家族は無事である。勤務校は静岡市で連絡は取れない。国道・JRのトンネルは全て崩落し、交通手段はない。あなたは山を越え勤務校へ出向く？	出向く	出向かない
クラス担任	通勤途中、学校を目前にして大地震発生。周囲では木造家屋が倒壊し、火災も発生している。学校も気になるが、自分の家族の安否も気になる。電話は不通で自宅に連絡が取れない。あなたは自宅へ戻る？	自宅へ戻る	学校へ行く
学校の安全担当教諭	11月の地震防災月間に向け急遽安全点検を行うことになった。各担任に高い所の荷物をおろすよう頼んだが置きっぱなしが目立つ。あなたは安全になるまで何度も呼びかける？	呼びかける	あきらめる
校長	勤務校の地元自治会から「12月第1日曜日(勤務校で行われる)地域防災訓練に生徒の様子を見てほしいから今年だけでも各担任も出してくれ。」と頼まれた。あなたは地元自治会に対して「はい」と言う？	「はい」と言う	無理だと言う
校長	大地震発生直後、校内で百名以上が骨折、裂傷等のけがをした。救護病院までは6kmで車は使えない。避難所指定の本校だが、いつ開設するかわからない。あなたは職員に命じてけが人をすぐに救護病院へ搬送させる？	搬送させる	搬送させない
小学校1年生の担任	4階の家庭科室で生活科の収穫祭中、大地震発生。コンロから出火し、今消せば消せるかもしれない。しかし、児童はパニックになり慌てている。けが人も出た。あなたは火を消すより、まず児童の避難誘導をする？	まず避難誘導	まず火を消す
クラス担任(3歳の息子有)	被災から2日経過。勤務中に被災したため、保護者への引渡しが終わりと、続いて避難所開設が全職員で始まった。職員全員で業務におられる中、家の事が気になるが連絡手段はない。あなたは手伝いをやめて一回帰宅したいと申し出る？	申し出る	がまんする
校長	2月の雨天、大地震発生後、何とか全校児童がグラウンドに避難した。避難して2時間、寒さで倒れる子が出た。校舎は倒壊しそうにないが多少被害がある模様。あなたは児童を校舎(体育館)内に戻す？	戻す	戻さない

連休はもうすぐ！
お出かけすべきか？
ゆっくり休むべきか？

クロスロード【火山学者編】

みなさんは2000年に起きた有珠山の噴火を覚えていますか？噴火の数日前から起きていた地下深くの異常をとらえ、噴火予知に成功し、さらにはその後の防災対応にも的確な助言を与えていた北海道大学の科学者たちをご記憶の方も多いと思います。

火山学者は噴火が起こると、日本国内はもちろん、世界中を飛び回って噴火活動を克明に記録したり、今まで知られていなかった新しい現象を発見して学会に発表したり、時には得られた観測事実をもとに、今後の噴火の見通しを報道や行政の人にお知らせして、防災対策に役立つ助言をすることが仕事です。特に前者は重要で、データを示して、他の火山学者より早く学会に発表することに学者生命をかけている純粋な科学者が多いのも特徴です。時には、危険きわまりないところまで近づいて行って、噴火現象を詳細に記録することもあります。

このような行動は時に一般の人たちに大きな誤解を生じさせることもあります。1990年から始まった雲仙普賢岳の噴火では、有名な火山学者が3名も亡くなりました。このとき、被災した報道関係者の一部の人は、火山学者の行くところなら安全だと思った人もいたようです。

先日、我々は調査のために雲仙普賢岳の麓にある島原市を訪れました。そこで、特徴的な火山学者の行動記録を目にすることができたので、これをクロスロードの問題としました。以下に2つの問題を示します。みなさんはどのように行動しますか？火山学者になったつもりで、考えてみてください。

- (1) 形成したばかりの溶岩ドームのサンプルがほしいが、山頂へのアプローチはかなり危険。幸い、水無川に溶岩ドームが崩落し始めた。とりにいく？
- (2) 溶岩ドーム崩落した最先端にたどりついた。報道では「溶岩ドームの崩落」といっていたが、あなたは火砕サージ堆積物を発見。同僚の火山学者は新鮮なサンプルを求めて上流へ行くといっている。あなたも上流へ行く？

【(1)の解説】

地下深くからマグマが上昇してきて、地表にでると溶岩になります。粘りけの強い溶岩は、ドーム状に盛り上がり、溶岩ドームとなります。溶岩ドームの性質（化学組成や鉱物の組み合わせ）を知ることは、地下にあるマグマの状態を推定するのに、大変重要です。火山学者はできるだけ早く新鮮な溶岩ドームを採取して、誰よりも先に分析結果を出したいと思っています。

雲仙普賢岳の場合、簡単に溶岩を入手することができませんでした。溶岩ドームが急斜面に成長したため、サンプルを取りに行くことが困難であったこと、溶岩ドーム自体が大変な高温であったことなどがその理由でした。

しかし、1991年5月24日、事態は急変しました。成長を続ける溶岩ドームの一部が崩落して、島原市の南側を流れる水無川に落ち始めたのです。今では、このような現象を「火砕流」として、広く認識されていますが、この時点では火山学者は、この現象を火砕流と認識していませんでした。火山学者も気象庁も、「溶岩ドームの崩落」と思いこんでいたのです。火砕流は大変危険な現象です。一緒に流れてくる火山灰を吸い込んだだけで、気管や肺がその熱で焼けただけ、皮膚に接触しただけ大やけどを負い、場合によっては即死します。

一部の火山学者は、崩落した溶岩ドームの先端を目指しました。しかし、溶岩ドームの崩落は連続して起きる可能性もあり、溶岩ドームの先端へ行くことは大変危険な行為だったのです。

この翌日、火山噴火予知連絡会は、溶岩ドームの崩落を「火砕流」と認定しました。

【(2)の解説】

これも(1)と同じ、1991年5月24日に実際にあった話です。危険を承知で溶岩流の先端にたどり着いた火山学者のうち一人が、堆積したものをみて大変驚きました。そこにあったのは、「溶岩ドームの崩落」による岩の塊ではなく、紛れもない「火砕流」の堆積物だったからです。そのとき、この火山学者は「これ以上、上流に行くと危ない」と思ったそうです。しかし、同僚の火山学者はまだ大丈夫だと思い、避難ルートを確認した上で上流に進むことにしました。結果的にはすばらしいサンプルが採取できたそうです。

雲仙普賢岳の噴火では、1991年6月3日に火山学者3名を含む43名が火砕流によって亡くなりました。火山学者は、この災害を教訓として、噴火研究の際の安全確保について、より一層深く考えるようになりました。

最後に、雲仙普賢岳に限らず、噴火観測の期間が長くなると、火山学者のまわりでは、いろいろ心温まることが起きてきます。地元の人たちと仲良くなったり、時には一緒に温泉に入ったり、地元との交流も活発になります。また、しばしば地元以外の人との交流も起きます。そんなときにも小さな善意のジレンマが生じることがあります。そんなエピソードをひとつ問題にしてみました。

噴火のお見舞いで県外の人が訪ねてきた。おにぎり100個を差し入れてくれるという。観測所には食べきれないくらい食べ物があって、もらっても困るが、おにぎりをもらう？もらわない？

みなさんはどうしますか？

(国土技術政策総合研究所 伊藤英之
秋田大学教育文化学部 林信太郎)



連休はもうすぐ！
お出かけすべきか？
ゆっくり休むべきか？

こんなところに心理学(11)：冷淡な傍観者？

心理学に「冷淡な傍観者」という名前と呼ばれる研究があります。この研究は、1970年代に盛んになる援助行動の研究の先駆けとなりました。

この研究は、1つの事件を発端にしています。それは、1964年のニューヨークでの殺人事件でした。深夜に帰宅したキティ・ジェノベーゼという若い女性が、自分のアパートの駐車場で、暴漢におそわれました。彼女は、ナイフで刺され、大声で助けを求めました。アパートの住民のうち、38人が気がついて明かりをつけたのですが、誰も彼女を助けにいかなかったのです。アパートの明かりがつくを見て、暴漢は一度その場を立ち去ったのですが、誰も助けに来ないのを見て、再度彼女を襲いに戻り、結果として殺してしまったのです。

もし、最初の助けを求める叫び声で、誰かが助けに言っていたら、彼女は殺されてしまうことはなかったでしょう。しかし、実際にはそうなりません。多数の人が見ていたのにもかかわらず、誰1人助けにいかなかったため、この事件は当初、「都会の人は冷淡だから人を助けることをしない」という風に解釈されました。

この解釈に疑問を持った研究者がいました。その人が行った研究が冒頭の「冷淡な傍観者」の研究です。この研究では、どういう人が援助をするのか、傍観者の人数も含めて膨大な数の研究が行われました。

結果としてわかったことは、援助行動の起こりやすさは、それを見ている人の数が増えるほど低くなる、ということでした。つまり、見ている人が多くなればなるほど、人助けをする人が少なくなるということがわかったのです。キティ・ジェノベーゼ事件では、「38人も見ていたのに」助ける人がいなかった、のではなく、「38人も見ていたからこそ」助ける人がいなかった、ということになります。都会の人が冷たい、とか、個人の性格などの要因はあまり援助行動に影響し

ないこともわかってきました。

こうした現象は、社会心理学では、以前から「社会的手抜き(ソーシャル・ローフィング、social loafing)」という名前でも知られていました。社会的手抜きとは、単独で作業するよりも、集団で作業する方が、一人当たりの作業量が低下する現象を言います。たとえば、1人で歌を歌うよりも、合唱した方が、個人個人の声の大きさが小さくなる、とか、拍手をする人が多くなればなるほど、1人1人が手をたたく音は、実は小さくなっている、というような事実が知られています。

もともと社会的手抜きは、20世紀の初めのリングルマンという人の綱引き実験でこの現象が知られるようになりました。この実験では、被験者にロープを引っ張らせ、その強さを測定しました。その結果、たとえば8人で引っ張った場合、一人当たりの引っ張る力は、1人で引っ張った場合の約半分となることが明らかになりました。

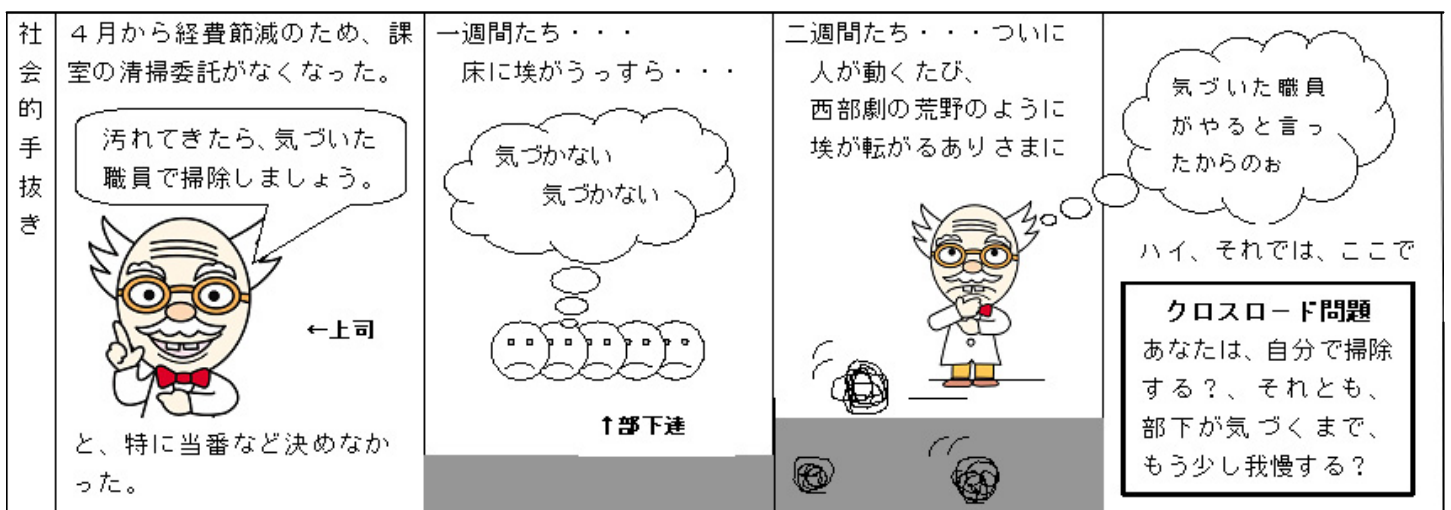
このような社会的手抜きの現象は、個人個人の努力量がわからなくなり、個人的な責任感が低下することによって生じるとされています。「私がやらなくても誰かがやってくれるだろう」と、思うわけですね。

人工呼吸の訓練を受けた方もたくさんいらっしゃるでしょう。そのとき、人工呼吸をする前に、見ている人を指名して、「そこの方、救急車を呼んでください。」と、言うことも学ばれたと思います。決して「誰か、救急車を呼んでください。」と言うとは学ばれなかったと思います。「誰か」というだけでは、結局誰も通報しなかった、ということになりがちだからこそ、「あなた」と指名して、通報してもらう方法が効果的なのです。

災害時には、援助が必要な場面がたくさん生まれてきます。私が助けなくても誰かが助けるだろう、と考えるのではなく、「冷淡な傍観者」のことを思い出して、「私が助けなくてどうする」という気持ちで助け合いたいものですね。

社会的手抜き

◎やなせたかし



クロスロード進級者発表です！

以下の方を中級に認定いたしました。(敬称略)

【中級】 国土技術政策総合研究所 伊藤 英之
秋田大学教育文化学部 林 信太郎

クロスロード
カードの裏面デ
ザインが新しく
なります。
どうぞ期待！

【応募先】 108-8345 港区三田2-15-45
慶應義塾大学商学部 吉川肇子研究室内
クロスロードサポーター事務局
電話：06-5427-1251
ファックス：03-5427-1578
メール：kikkawa@aoni.waseda.jp

電子投稿はこちら↓
[http://maechan.net/
crossroad/toukou.html](http://maechan.net/crossroad/toukou.html)



防災教育をテーマにした新しい本が出ますー「夢みる防災教育」

防災教育をテーマにした新しい本が出ます。タイトルは、「夢みる防災教育」。この耳慣れない言葉を、私たちは次のような意味をこめて使いました。ふつう、防災教育は、自然災害という人間・社会に対する脅威と私たちが対決するための知識・技術を教育・学習することとされています。だから、防災教育というと、「よくて、プラスマイナスなしの現状維持。悪くすると、大きなマイナス」というイメージがつかまといまます。夢や理想などとは、縁もゆかりもない、もっと現実的で実務的なことのように考えられがちです。

でも、この本では、防災教育を、人間や社会が、「自分はこうなりたい」、「この町をもっとこんな風にしたいたい」ーそういった将来の夢について語り、さらにその夢を実現していくための機会（チャンス）であると、より積極的な意義をもつ存在だと位置づけたいと思いました。つまり、防災教育には、防災知識・技術の教示と習得という狭い役割ーもちろん、これも防災教育の重要な要素なのですがーを超えた豊かな可能性があることを示したかったのです。

だから、別の言い方をすれば、防災教育は、防災に関心のある人（だけ）のためにあるものではありません。むしろ、「防災など、人（子どもたち）が学ぶべき全体と比較すれば、ごく一部のことで、小さな1領域、1テーマに過ぎない」と、これまで思ってきた方々にこそ、防災教育の豊かな可能性（夢）を知ってほしいのです。なぜなら、「命の大切さ」、「真の学力」、「共に社会を担う市民性」ーこのような、現在、教育界で盛んに議論されていること、ひいては、社会全体で切実な課題となっている大きな目標（つまり、夢）の実現にとって、防災教育は絶好の機会（チャンス）を提供するものだからです。

と言っても、この本、理屈を書いているわけではありません。下記のように、防災教育の現場ですぐに役立つアイデア、実践事例が盛りだくさんです。なぜって、執筆者は、日本初の環境防災科をリードしてきた兵庫県立

舞子高等学校の諏訪清二先生、そして、今年、「防災教育チャレンジプラン」でグランプリに輝いた神戸学院大学防災社会貢献ユニットの船木伸江先生（それから、私）だからです。

「クロスロード」をご支援をいただいている皆様には、もちろん、お役に立てただけのものと思いません。そして、皆様の周囲に、防災には正直あまり興味ないけど、教育問題や子どもに関心を持っているという方がいらっしゃったら、ぜひご推薦ください。きっと、防災そのものに関心を持っていただけられるようになると思います。

5月初旬には店頭にも並びます。

矢守克也・諏訪清二・船木伸江（著）「夢みる防災教育」
（晃洋書房、たぶん2000円程度）

主な内容

第Ⅰ部 夢みる防災教育

- 第1章 人間力・生活力・市民力を育む防災教育
- 第2章 防災教育ー過去・現在・未来

第Ⅱ部 防災教育の新しいフレームワーク

- 第1章 防災教育はどのように災害文化を創るか
- 第2章 防災教育にどのようにアプローチするか
- 第3章 防災教育でどのような人間を育てるか
- 第4章 防災教育をどのようにデザインするか

第Ⅲ部 すぐに使えるアイデア事例集

- 第1章 教科を越える防災教育の展開
- 第2章 教科で取り組む防災教育ー神戸学院大学生による教材開発のチャレンジ
- 第3章 中・高等学校の事例ー兵庫県立舞子高等学校

(矢守克也)

子供に教える安全～フランス編～

安全について、子供にどんなことを教えているのか、今号ではフランスの子供向け(おそらく小学校中学年くらいまで?)の本をご紹介します(右の写真は表紙です)。

本のタイトルは、直訳ですが、「私にお話しして～市民の安全保障」という感じでしょうか?その内容は、市民の安全に関するあらゆることが網羅されています。

この本によると、フランスは2004年にこの件に関する法律と行政組織を変更したとのことで、その変更のあらましや、日常の安全保障について、非常にわかりやすく、しかも広範囲に書いてあります。

具体的にどのような内容がかかっているかという、以下のような感じです。。

(1)1999年の暴風雨災害(92人が死亡)をきっかけに、気象情報の提供の仕方を、その内容も含めて一新したこと。ポイントは情報伝達を迅速に、マスメディアも使ってやるようになったこと。

(2)情報提供をするにあたって、各地域ごとにリスクの評価をきちんとしたこと。結果として、たとえば、自然災害のリスクについては、(「フランスは日本じゃないけどね」と書いてありますが)、地震が起こる地域もあること、地中海の津波のリスクはゼロではないとわかったこと、などとかかかっています。

(2)2004年の法改正のポイントは2つで、情報の集約化(組織の見直し)と伝達(簡明な情報を迅速に伝える)。たぶん関係があると思いますが、パリでは以前に比べて建物や公共空間での避難経路図が一新されていました。

(3)政府として、市民は守るけれども、市民安全保障の中心は、市民。日本で言うところの「自助」ですね。まず、家庭内で子供が亡くなる一番の原因は溺死によるもので、長年これを減らすためにさまざまな努力がなされたことが説明されています。たとえばパンフレットの配布や、救命救急処置の教育などがあり、特に後者によって、救命率が5倍になると説明されています。また、古典

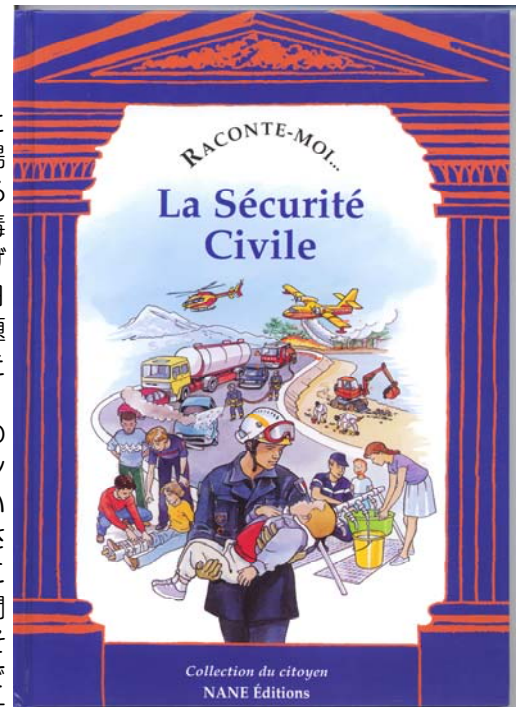
的(?)な事故としては、ガス湯沸かし器による二酸化炭素中毒事故の話もあげてあります。日本でも最近話題になりましたね。

(5)緊急時のとき、サイレンは1分間に(短い無音期間をはさんで)3回鳴ること、逆に1分間鳴り続けるとその警報の解除であること。日本では、同じ場合にどのようなサイレンが鳴るか、皆さんはご存じですか?

このほか、1970年代に15000人だった交通事故の死亡者数が、現在では5000人弱になったことや、飲めない水を飲用水にして(毎時5000リットル!)給水する装置などが紹介されているなど、興味深い情報満載です。

小さい子供にこんなことまで教えるのか?と思われるかも知れませんが、これを子供に読み聞かせる大人にも(そして、それを買ってくる外国人にとっても!)、読んでいううちに知らず知らずにさまざまな情報が身につくという意味では、とても効果的だと思います。

この「お話しして」シリーズは、たくさん出版されており、「裁判所」や「郵便局」について、があったかと思うと、「遺伝子組み換え食品」や「NATO」について、など、扱う分野が幅広く、子供に対して手も抜いていない印象でした。



みなさんへ より あなたへ ©やなせたかし

